

[松田教授開講拾周年記念論文]

外聴道ニ自潰セル乳兒口蓋扁桃腺周圍膿瘍

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室（主任松田教授）

津 田 三 郎

Saburo Tsuda

(昭和16年7月1日受附)

(本論文ノ大要ハ昭和15年3月31日、大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第49回集會ニ於テ述べタリ)

内 容 抄 錄

口蓋扁桃腺周圍膿瘍ノ乳幼兒ニ發スルハ稀有ニシテ
然モ同側ノ外聴道ニ自潰排膿シ治癒セシハ興味アル症
例ナリ。余ハ最近斯ル症例ヲ經驗セリ。

本症ハ10歳以下ニハ僅小ニシテ多ク青壯年ニ發シソ

ノ原因ハ解剖學的、生理學的相異ニヨルモノナリ。
而シテ本膿瘍ガ同側外聴道ニ自潰スルニ至ル經路ニ
3型アルヲ認メ、本邦文獻ニアラハレタル症例ヲ述べ
考察ヲ行ヘリ。

目 次

第1章 緒 言

原因、發生年齢、合併症

第2章 自驗症例

第4章 結 論

第3章 考 按

第1章 緒 言

口蓋扁桃腺周圍膿瘍ハ日常屢々見ラル、疾患
ニシテ、壯青年者ニ多ク乳兒ニ來ルハ稀有ナ
リ。

一般ニ6歳以下ニ於ケル本膿瘍ノ發來頻度ハ
2%ト稱セラル。

而シテ本膿瘍ノ排膿孔ハ扁桃腺自身ニ因スル
モノナラバ、當然扁桃腺周圍ニ求ムベク、ソノ

同側ノ外聴道ニ排膿セル症例ハ報告僅少ナリ。
余ハ最近生後6箇月ノ男兒ニシテ口蓋扁桃腺
周圍膿瘍ヲ形成シ、之ガ何等手術的操作ヲ加フ
ルコトナク同側ノ骨部外聴道ニ自潰排膿シテ治
癒セル一症例ヲ經驗セシ故、ソノ經過ヲ記述
シ、併セテ過去ノ文獻ヲ參照シ考按ヲ試ミント
ス。

第2章 自 驗 症 例

〔患者〕 南部某、男子、生後6箇月ノ母乳榮養兒。

〔初診〕 昭和14年12月27日。

〔主訴〕 微熱及ビ哺乳困難。
 〔家族歴〕 兩親共ニ健全ナルモ，父ニ習慣性扁桃腺炎アリ。同胞ナシ。
 〔既往症〕 出産ハ11箇月目ニシテ，経過異常ナシ。麻疹及ビ種痘ハ経過セズ。

〔現病歴〕
 12月17日頃ヨリ何等動機ト思考サルベキモノナクシテ，37.5°C前後ノ發熱アリ。食思不振トナリ輕キ咳嗽ヲ發ス。睡眠タメニ良好ナラズ。依ツテ12月18日小兒科ニテ受診シ，氣管支炎ナリトテ治療ヲウケタルモ快方ニ向ハズ。4日程前ヨリ授乳スルモ直チニ乳首ヲ放シ，哺乳困難ナリ。無理ニ哺乳セシメントセバ，呼吸困難ニ陥ルトテ外來ヲ訪ル。

〔現症〕
 一般状態ハ發育榮養共ニ良好ニシテ，顔面稍々蒼白，活氣ニ乏シ。體溫37.8°C。
 局所々見
 聽器及ビ鼻腔ニハ著變ヲ認メズ。
 咽頭ハ齒牙，下内門齒ノ發生ヲ見ル。
 粘液口腔ヲ充タシ吸引シテ漸ク深部ヲ觀察シ得タリ。
 右側口蓋扁桃腺ハ發赤，腫脹スレドモ，偽膜及ビ腺管栓子ヲ認メズ。
 同側口蓋扁桃腺周圍ハ發赤膨隆ス。

左側口蓋扁桃腺ニハ異常ヲ認メズ。
 右頸下淋巴腺ハ豌豆大ノモノヲ1箇觸知ス。

〔經過〕

依ツテ前記ノ症狀ヲ説明シ，扁桃腺周圍膿瘍ノ故ヲ以テ切開ヲ待ハシユコトヲ薦メタリシガ，明日父親ト共ニ來リテ切開ヲ受ケタシト希望シテ當日ハ一旦歸宅セリ。翌日再來シ母親ノ訴フルニハ，昨晩歸宅セヨリ突然右耳漏アルヲ認メタリ。然シテ患兒ノ機嫌頓ニ良好ニナレリト。

檢スルニ右側外聽道ニ濃厚ナル膿汁充滿シオレリ。之ヲ清拭シ外聽道内部ヲ診ルニ，外聽道深部ノ前下壁輕ク腫脹シ，發赤ス。

試ミニ右側口蓋扁桃腺周圍ヲ壓セバ，同側外聽道ニ膿汁ノ排出スルヲ認メタリ。

之レ明ラカニ口蓋扁桃腺周圍膿瘍ト同側外聽道トノ交通ヲ推定セシムルモノナリ。

膿汁ヨリ塗抹標本ニヨリ，雙球菌ヲ證明セリ。

其後膿瘍部ヲ口腔ヨリ穿刺スルコトナク，該部ヲ輕ク壓迫シテ外聽道ヘノ排膿ヲ計リタリ。

1月4日，右側口蓋扁桃腺周圍ノ腫脹殆ド認メラレズ。扁桃腺ハ僅カニ發赤ヲ呈スルノミナリ。扁桃腺周圍ノ壓迫ニヨリテモ外聽道ニ膿汁ヲ認メザリキ。斯クシテ外聽道ニ自潰後，8日目ニシテ，排膿ヲ認メザルニ至リ，殆ンド治癒セルモノノ如シ。

第3章 考 按

口蓋扁桃腺周圍膿瘍ハ扁桃腺自身ノ急性或ハ慢性炎症ニ續發スルモノナリ。

而シテ稀ニハ遠隔部ヨリ起炎菌ノ侵入スル場合，即チ術後性ニ來ル。又周圍ノ化膿性炎症即チ齒槽骨膜炎，乳様突起炎等及ビ扁桃腺又ハソノ周圍ヨリ入レル異物，例ヘバ，魚骨ガ核トナリテ膿瘍ヲ形成ス。

本症ノ起炎菌ハ大多數ハ溶血性連鎖状球菌ニヨル。細谷，山本兩氏ニヨレバ，

1) 連鎖状球菌	34%
2) 葡萄状球菌	23%
3) 連鎖状球菌十葡萄状球菌	30%
4) 連鎖状球菌十雙球菌	13%

Gerhard Fliese (Berlin 1925) ハ1921年ヨリ1924年ノ間ニ106例ノ本患者中次ノ如キ結果ヲ

報告セリ。

10歳代	(膿瘍形成ナシ)	1例
20歳代		1例
30歳代		53例
40歳代		27例
50歳代		6例
60歳代		1例

而シテ30歳代最モ多ク，27歳ハ9例ヲ算シタリト言フ。

吾ガ教室ニ於テ，1933年ヨリ1939年迄115例ノ本患者中次ノ結果ヲ得タリ。

10歳代	1例
20歳代	7例
30歳代	54例
40歳代	33例

50歳代 11例
60歳代 5例
70歳代 4例
即チ30歳及ビ40歳代最モ多ク，20歳，50歳代之ニ次グ。

尙119例中，68例ハ男性ニシテ，51例ハ女性ナリキ。

又最近10箇年間ニ於ケル乳幼兒ノ扁桃腺周圍膿瘍ノ報告例ニ就キ観察スルニ次表ノ如シ。

	報告者	患者年齢	性	左右	處置	起炎菌
1	江浦	3年		左	切開	
2	中村(晃)	1年2箇月	♂	右	切開	連鎖状球菌
3	加藤	8箇月	♂	左	切開	連鎖状球菌
4	大藤	3年	♂	右	切開	連鎖状球菌
5	中村(博)	1年8箇月	♂	切	切開	非溶血性連鎖状球菌
6	岡立	8箇月	♂	右	切開	
7	立松	50日未満—1例， 4年—2例				50日未満—1例，50日—1例，1年—1例，3年—3例， 4年—2例
8	須江	2年	♂	右	外聴道ニ自潰	連鎖状球菌
9	牟田	2年9箇月	♂	左	自潰	連鎖状球菌+桿菌
10	佐藤(恭)	65日	♂	切	開	葡萄状球菌
11	菅谷	1年2箇月	♂	右		溶血性連鎖状球菌
12	佐藤(日)	1年2箇月	♂	右	切開	
13	南谷	6箇月	♂	右	3回穿刺	
14	柳原	1年3箇月	♀	左	切開	
15	岡島	101日	♀	左	切開	連鎖状球菌
16	安川	2年3箇月	♂	左	穿刺	連鎖状球菌
17	ク	2年6箇月	♂	左	切開	連鎖状球菌
18	浅黄	2年2箇月	♀	右	切開	
19	東海林，維田	3年	♀	右	穿刺	連鎖状球菌
20	金田	3年	♂	左	切開	
21	神野	3箇月	♂	右	穿刺	
22	西村	4年	♂	右	切開	
23	清水(宗)	64日	♂	右	切開	肺炎双球菌
24	韓福	3年	♂	左	外聴道ニ自潰	連鎖状球菌，双球菌
25	島	6箇月	♂	切	開	葡萄状球菌

發現年齢ノ最モ早キハ，立松氏ノ生後50日未満及ビ50日，共ニ1例。次ニ清水氏ノ64日，佐藤氏ノ65日各1例アリ。

1歳代 11例，2歳代 6例，3歳代 12例，
4歳代 3例。

生後1箇年以内ニ於ケルモノ及ビ3歳ノモノ最モ多シ。

起炎菌ノ記載例，15例中，連鎖状球菌9例，葡萄状球菌2例，連鎖状球菌+桿菌1例，連鎖状球菌+雙球菌1例，雙球菌1例，連鎖状球菌+葡萄状球菌1例。

即チ連鎖状球菌ニヨルモノ断然大多數ヲ占ム。

本症ガ乳幼兒ニ僅少ナル理由ニ就キテハ，扁桃腺組織ハ胎生時既ニ發芽シ，生後直チニ増大シ，幼時早期ニ發育成熟シ，又早期ニ退行變性ヲ行フモノナレバ，斯ク發育旺盛ナル，乳兒及ビ年少者ハ上窩及ビ腺窩ノ幅廣ク且ツ淺ケレドモ，青少年者ノ如ク發育ノ極期ニテハ肥大セル實質組織ニヨリ上窩及ビ腺窩壓迫セラレ狹小トナリ，又外界ヘノ通路ヲ閉塞サレタル盲管モ組織ノ肥大ト共ニソノ深サヲ増スニ至ルナリ。

之レガ細菌介在シ繁殖ニ便ナラシメ、且ツ扁桃腺被囊ニ炎症及ビ、之ヲ通ジテ周圍組織ニ達セシムルナリ。

更ニ扁桃腺ノ機能ニツキテハ古來諸説アリテ未だ一定セズ。

現今互ヒニ相容レザル兩説存在ス。

即チ一ハ、扁桃腺上皮間隙ヲ細菌、病毒ノ侵入門戸ナリトシテ、傳染媒介説ヲ唱ヘ、又一ハ之ニ反シ上皮間隙ヨリノ遊出細胞ノ喰菌作用ニヨル傳染防禦説ヲ唱フ。

而シテ又傳染防禦モ反復セル炎症ニヨリ、ソノ機能ヲ失フニ至リテ初メテ、細菌、病毒ノ侵入門戸トナルモノナリト説クモノアリ。然ラバ此ノ説ニ據ランカ、即チ乳幼兒ハ口峽炎ノ反復少ナキガ爲メ傳染防禦ノ機能ハ旺盛ニシテ本膿瘍ノ發生モ僅少ナルベシ。

本症ノ合併症トシテハ喉頭浮腫ハ同側頸部ヨリ下行シテ發生スルモ稀ナリ。

Angina Ludovici モ時ニ發スルコトアリ。

扁桃腺ハ上咽頭收縮筋及ビ咽頭筋膜トノ形成スル所ノ咽頭側壁ニヨリ、副咽頭間隙ト隔テラル、故ニ此處ニ膿瘍ノ形成サル、ハ容易ナリ。該間隙ハ各種ノ器官ト相接スルガ爲メ、先ヅ内頸動脈ガ侵襲サルレバ、大出血ヲ來シ致命的ナリ。

頸部靜脈ニテハ血栓性靜脈炎ヲ、又膿瘍ガ後咽頭腔ニ至リ、之ヨリ前脊椎間隙ヲ經テ縱隔竇ニ侵入シ膿瘍形成ヲナスコトアリ。又敗血症、膿毒症、脳膜炎等ヲモ合併ス。

本膿瘍ト鑑別スペキ疾患ハ先づ副咽頭間隙膿瘍ナリ。

兩者共ニ發熱、咽頭痛、嚥下痛、牙關緊急ヲ發スレドモ、前者ハソノ腫脹ハ扁桃腺周圍部ニ甚ダシク、顎下腺ノ腫脹ハ認メラル、トモ僅微ナリ。後者ハ扁桃腺及ビソノ周圍ノ發赤、腫脹僅カニシテ、扁桃腺ハ内方ニ突出シ、咽頭側壁ニ腫脹アラハル、コトアリ。

顎下淋巴腺ノ腫脹著明ニシテ、板様硬固ノ廣汎ナル浸潤ヲミルコト恰モ、Angina Ludovici ノ如シ。

而シテ Angina Ludovici ハ口腔底ノ浸潤、舌ノ運動障礙ヲ來ス。

本症ハ前述セル如ク扁桃腺被膜ト咽頭側壁トノ間ノ粗鬆結締組織中ニ膿瘍ヲ形成セルモノナル故、扁桃腺炎ニ續發セルモノナラバ、當然排膿孔ハ扁桃腺ニ求ムベシ。

而シテ扁桃腺々窩内容ノ排泄困難ナル場合ニ於テハ、殊ニ扁桃腺周圍組織ノ比較的柔軟ニシテ抵抗少ナキ乳兒ニテハ、排膿孔ヲ扁桃腺以外ニ求メ恐ルベキ前述ノ如キ合併症ヲ惹起スベシ。

ソノ外聽道ニ排膿孔ヲ求メ、他ノ合併症ヲ起サズ治癒セルハ蓋シ幸運ナル症例ナリ。

膿瘍ノ外聽道ニ穿孔スルハ、外聽道癌ノ自潰セルヲ除キ次ノ場合ナリトス。

即チ扁桃腺周圍膿瘍、副咽頭間隙膿瘍、耳下腺膿瘍、淋巴腺膿瘍、咽後膿瘍、下顎骨々髓炎等ナリ。

本周圍膿瘍ノ外聽道ニ自潰シタル本邦ニ於ケル文獻ヲ繙クニ、

須江氏ハ2歳ノ男子ニシテ、麻疹ノ經過中急性咽頭炎ヨリ、右側口蓋扁桃腺周圍炎ヲ發シ、次デ周圍膿瘍トナリ同側外聽道ニ皮下膿瘍ヲ形成シ、外聽道ニ破レシモノニシテ、膿汁ヨリハ連鎖球菌及ビ雙球菌ヲ證明、而シテ同側ノ中耳炎ヲ合併シ、40日ニシテ全治セシ症例ヲ報告シ。

菅谷氏ハ1年2箇月ノ男子、本膿瘍ノ診斷ノモトニ穿刺シ、ソノ晚ニ同側外聽道ヨリ排膿シ、扁桃腺周圍部ヲ壓迫シ外聽道ヨリ排膿ヲ續ケ入院後13日ニシテ全治セル、即チ副咽頭間隙膿瘍ヲ發シ、歐氏管ヨリ中耳腔ニ至リ、鼓膜ヲ穿孔シテ排膿治癒セル症例ヲ報告シ。

細見氏ハ6歳ノ小兒ニテ、左側扁桃腺周圍膿瘍ガ骨部外聽道深部下底ニ自潰排膿シテ治癒セル1例ヲ、

大井氏ハ19歳ノ男子ニテ、左側扁桃腺周圍膿瘍ヲ發シ、左下顎部及ビ頬部ノ腫脹、壓痛、牙關緊急、發音障礙等ノ後、突然左耳漏ヲ來シ、膿瘍部ヲ壓迫スルニ左外聽道軟骨部後下部ノ瘻

孔ヨリ膿汁ヲ排出シ、瘻孔ヨリ造影剤ヲ注入シ、「レントゲン」撮影ニヨリテ、外聴道ト膿瘍部ト連絡セルヲ認メ、而シテ膿汁ヨリ葡萄球菌ヲ證明シ、扁桃腺周圍ヨリ切開排膿後15日ニシテ全治セル症例ヲ、

栗山氏ハ5歳ノ小兒、風邪後發熱ト耳痛ト次ニ耳漏多量アリ。乳嘴突起炎ノ症狀ヲ呈シタル故、鑿開術ヲ施行セルニ斯カル多量ノ膿汁ヲ見ルガ如キ變化認メラレズシテ、左側口蓋扁桃腺及ビソノ周圍中等度ニ發赤、腫脹シ、穿刺ニヨリ膿汁ヲ證明シ得ザリシモ、種々考究ノ結果、扁桃腺周圍膿瘍ノ外聴道ニ自潰セルモノト思考サルベキ1症例ヲ追加シ、

齋藤氏ハ1年2箇月ノ男子、左側扁桃腺炎ヨリ、ソノ周圍炎ヲ發シ、續イテ副咽頭間隙ニ膿瘍ヲ形成シ、頬部、下顎部、側頸部ニ板様硬固ナル腫脹ヲ現ハシ、左側扁桃腺周圍部、咽頭後壁、左顎下腫脹部ヲ穿刺中、突然左外聴道ニ膿汁流出シ來タリ、膿汁ヨリ黃色葡萄球菌ヲ證明シ、而シテ發病後36日ニシテ全治セル症例ヲ報告シ、

韓氏ハ3歳ノ小兒、左側口蓋扁桃腺周圍炎ヲ發シ、6日目ニ發赤消退シ、腫脹ノミ残リタルヲ以ツテ、吸收ヲ促スペク、「ソラツクス」燈照射、溫罨法ヲ續ケ11日目ニ左側耳漏ヲ來シタリ。外聴道深部下壁ニ瘻孔アリ。扁桃腺周圍部ヲ切開後、外聴道瘻孔ヨリ、「リバノール」液ヲ注入シ、軟口蓋ノ切開創ヨリ流出スルヲ認メタリ。細菌ハ外聴道ヨリ雙球菌ヲ、切開創ヨリハ雙球菌及ビ連鎖状球菌ヲ證明シ、而シテ軟口蓋切開後5日目ニ、外聴道ノ瘻孔ハ切開後2週間にシテ治癒セル症例ヲ夫々報告セリ。

以上ノ症例ニ就キソノ外聴道ヘノ排膿経路ヲ考フルニ凡ソ3型存在ス。

1) 膿瘍ガ先づ副咽頭間隙ニ侵入シ、ソレヨリ隣接セル耳下腺周圍組織ヲ破リテ外聴道ニ出ヅル場合。

2) 副咽頭間隙膿瘍ヨリ歐氏管ニ穿孔シ、次

ニ中耳腔ヨリ鼓膜ヲ通ジテ外聴道ニ出ヅル場合。

3) 前咽頭間隙ニ侵入シ、次デ内翼状筋ヲ侵シテ外方ニ出デ、下顎骨蝶状突起ノ後方部、即チ外聴道ノ前下壁ヲ形成セル側頭骨鼓室部ノ前面ニ現ハレ、偶々此ノ骨部外聴道ノ下底ニ存セル骨缺損部ヨリ外聴道ニ穿孔セシ場合ナリ。

而シテ又一方膿瘍ノ外聴道ヘ自潰スルニ、3ノ條件存ス。

1) 扁桃腺周圍膿瘍ガ周圍組織ニ侵入シ、ソレヨリ隣接セル組織ニ進ミ外聴道骨部又ハ軟骨部ヲ穿孔シ皮下膿瘍ヲ形成シ自潰スルモノ。

2) 外聴道壁ニ瘻ヲ形成シソレガ外聴道骨部又ハ軟骨部ヲ侵シテ内方ニ進ミ、存在セシ口蓋扁桃腺周圍膿瘍ト交通セル場合。

3) 耳瘻ガ内部ニ侵襲シテ扁桃腺周圍部ニ流注シ該部ニ膿瘍ヲ形成セル場合。

今余ノ経験セル症例ニ就キテハ、副咽頭間隙膿瘍ヲ形成セル如キ顎下淋巴腺ノ腫脹著明ナラズ、又側頸部ノ板様硬固ノ廣汎ナル浸潤ヲモ認メラレズ。耳下腺ノ侵襲サレタル症狀ナク、自潰前ニ外聴道及ビ鼓膜ニ、又自潰後鼓膜ニ何等變化ナシ。

而シテ本患者ハ生後6箇月目ニシテ側頭骨鼓室部ハ未ダ完全ナル外聴道ヲ形成セザルコト等ヨリシテ、本症例ハ口蓋扁桃腺周圍膿瘍ヨリ周圍組織ヲ侵シ骨部外聴道ニ自潰セシモノニシテ、自潰経路ハ第3ノ場合ニヨリタルモノナルベシ。

本膿瘍ハ初發當時ハ極メテ烈シキ苦痛ヲ伴フモノナルモ、合併症ヲ併發セザル時ハ切開又ハ自潰ニヨリ排膿ヲミレバ苦痛頓ニ緩解ス。

前述セシ如キ合併症ヲ繼發セバ、ソノ豫後極メテ重篤ナリ。

故ニ本症ノ診断ヲ得バ直チニ手術的ニ排膿ヲ計ルヲ最上トス。

又多ク扁桃腺ニ原因スルモノナレバ、近時膿瘍時ニ扁桃腺摘出術唱導サル。

第4章 結 論

- 1) 本症例ハ生後6箇月ノ男兒ニ來レル口蓋扁桃腺周圍膿瘍ニシテ，何等手術的操作ヲ加フルコトナク同側ノ外聴道ニ前述セル如キ經路ヲ取り自潰排膿シ幸運ニモ重篤ナル合併症ヲ併發セズシテ治癒シタル興味アル症例ナリ。
- 2) 乳幼兒ニ口蓋扁桃腺周圍膿瘍ノ僅小ナル理由トシテ，解剖學的，生理學的相異ヲ擧げタリ。
- 3) 我ガ教室ニ於ケル口蓋扁桃腺周圍膿瘍ノ115例中，30歳及ビ40歳代最モ多ク，10歳代ハ1例ノミ。

4) 最近10箇年間ノ本邦文獻ニ現レタル乳幼兒ノ本症32例ニ就キ發現年齢及ビ起炎菌ヲ觀察セシトコロ，發現ノ最モ早キハ50日前後ニシテ，起炎菌トシテハ連鎖狀球菌大多數ヲ占メタリ。

5) 本膿瘍ノ外聴道ニ自潰セル，須江，菅谷，細見，大井，栗山，齋藤，韓ノ諸氏ノ症例ヲ述ベソノ自潰經路ヲ考察セリ。

擷筆スルニ當リ，御指導御校閱ヲ賜リタル恩師松田教授ニ深甚ナル謝意ヲ表ス。

文

- 1) Finder: Denker-kahler Handbuch Bd. III.
- 2) 山本，細谷，扁桃腺病學，昭和4年。 3)
江浦，耳鼻咽，4卷，1號，62頁。 4) 中村
(晃)，耳鼻咽，4卷，7號，668頁。 5) 加
藤，耳鼻咽，5卷，8號，739頁。 6) 大藤，
耳鼻咽，6卷，2號，128頁。 7) 中村(博)，
大日耳鼻，39卷，7號，826頁。 8) 岡，大日
耳鼻，39卷，7號，826頁。 9) 立松，耳鼻
咽，7卷，5號，456頁。 10) 須江，滿鮮醫
界，162號，7頁。 11) 牟田，大阪醫新誌，
5卷，3號，383頁。 12) 佐藤(恭)，耳鼻
咽，7卷，11號，959頁。 13) 菅谷，耳鼻
咽，8卷，5號，437頁。 14) 佐藤(日)，大
日耳鼻，41卷，7號，963頁。 15) 南谷，滿
鮮醫界，174號，51頁。 16) 柳原，診斷ト治
療，22卷，12號，1701頁。 17) 岡島，日本鐵

獻

- 道醫協會誌，22卷，9號，772頁。 18) 安川，
臨床日本醫學，6卷，11號，1147頁。 19) 滝
黃，耳鼻臨，32卷，11號，1098頁。 20) 東海
林，維田，醫療組合誌，2號，1號，29頁。 21)
金田，臨床醫學，26年，2號，267頁。 22)
神野，診療ト經驗，2卷，6冊，647頁。 23)
西村，耳鼻咽，11卷，9號，879頁。 24) 清
水，耳鼻臨，33卷，11號，944頁。 25) 韓，大
日耳鼻，45卷，1號，164頁。 26) 福島，大
日耳鼻，45卷，2號，378頁。 27) 館木，達
田，大日耳鼻，45卷，6號，729頁。 28) 齋
藤，大日耳鼻，44卷，10號，1886頁。 29) 崔
耳鼻咽，9卷，9號，853頁。 30) 大井，耳鼻
臨，32卷，4號，418頁。 31) 細見，耳鼻
臨，32卷，1號，92頁。